

令和5年度 愛知教育大学入学試験問題
標準的解答例または出題の意図及び評価の観点

【前期日程】

科目名： 心理コース（総合問題）

問1 出題の意図 文脈からの適切なことばの推論力を問う。

回答例：「記憶力」または「記憶」

問2 出題の意図：こどもの持つ可能性についての理解と記述力を問う。

回答例：親戚には長い間、会うことがなかったにも関わらず、久しぶりに会う親類の顔を覚えており、数年前の訪問時の出来事を思い出し、その時に傷ついた肩を見せることで自分が覚えていることを示そうとした。知的な障害があることで学習にはサポートが必要であることが多いにもかかわらず、今までにも日常的な出来事についてはよく覚えていることがエピソードとしてあり、周りが考えているよりも本人の能力は周りをよく見ていることを改めて知らされたため。

問3 出題の意図：状態の受け入れと価値について著者の視点の推測・判断を問う。

家内は子育てを主に行ってきており、本来であれば子育ても一段落ついたところであり、自分の時間を使い家族旅行も制約無く過ごすことができると考えられる。兄はすでに旅行にはついてこなくなったことから、ダウン症の子どもがいなければ夫婦二人またはひとりでも旅行をすることができる時期であると考えられる。自分の時間を子どもと使い続けることで本来であればあり得る自分たちのより自由な状況を想像してもこの状態の価値を感じていると著者は考える。そして、子どもがいることで旅行を過ごすことで様々な手をかける状況を生み出しても家族としてのかけがえのなさを感じさせる存在であることを家内が感じていると著者は考えている。

問4 出題の意図：全体の理解（状態の理解と可能性）および俯瞰的な観点を問う。

目を離すことができないほど多動な面もあるが、犬に噛まれた肩をその体験を知っている親戚にみせるなどの行動を示すこともある。子どもの特徴による制限があるものの、時間をかけて付き合うことで、子どもの成長の過程を知ることができることに著者と家内は気がついている。ただし、子どもはダウン症があることで直接正確に物事を伝える術を持たないため、周りは見守ることからでの推測でしかない。しかし、その成長について見守りながらうかがい知ることで、肯定的にとらえている。その上で、その限界についても理解しており、そのため正確に子どもの内面的な世界を知ることにはできないが、主観的な理解に留まりながらも成長を肯定的に考えている。